

つつじ読書会 11月9日(土)

森の生活 下巻 ウォールデン』H・D ソロー(1817-62)著

1. 前回のおさらい

ソローの森の生活から浮かびあがるもの「私」

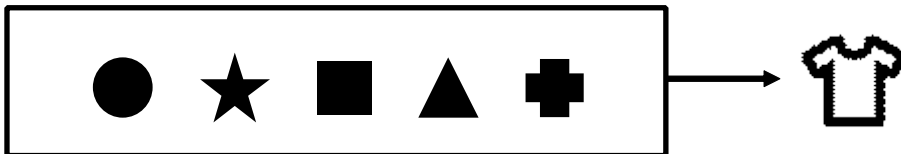
「だが私は、ひとさまに決して私流の暮らし方などまねてほしくない(中略)むしろめいめいが、父や母や隣人ではなく、自分自身の生き方を発見し、それをつらぬいてほしいものだ。(上巻 p.129)」

「おそらく私は、社会がこちらに押しつけてくる善をなすために、いや、たとえ宇宙を破滅から救うためであろうと、自分に与えられたかけがえのない天職を意識的・意図的に捨て去るべきではないであらう。こうした精神に似てはいるが、比較を絶して偉大な、ある不動の精神がどこかに存在するからこそ、いまも宇宙は破滅をまねがれているのだと私は信じている。(上巻 p.130)」

➡個こそが、普遍的だという洞察

[図1]

仕立て屋の女(p.49)

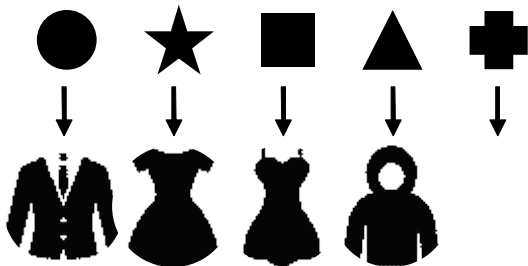


上着をかけておく釘のようなつもりで測る、すなわち、●★■▲+と、それぞれの異なる「個」を十把一絡げに扱い、同じ服を押しつけてくる。近年では、これをすべての人に通用するものとしてのユニバーサルデザイン(=普遍的なデザイン)とされ、善しとされる。(職人仕事から効率化による労働の画一化に進む、テイラー主義。(斎藤幸平『ゼロからの資本論』))

[図2]

ソローは、めいめいが自分自身の服を発見し設え、それをつらぬいてほしい、とっている。

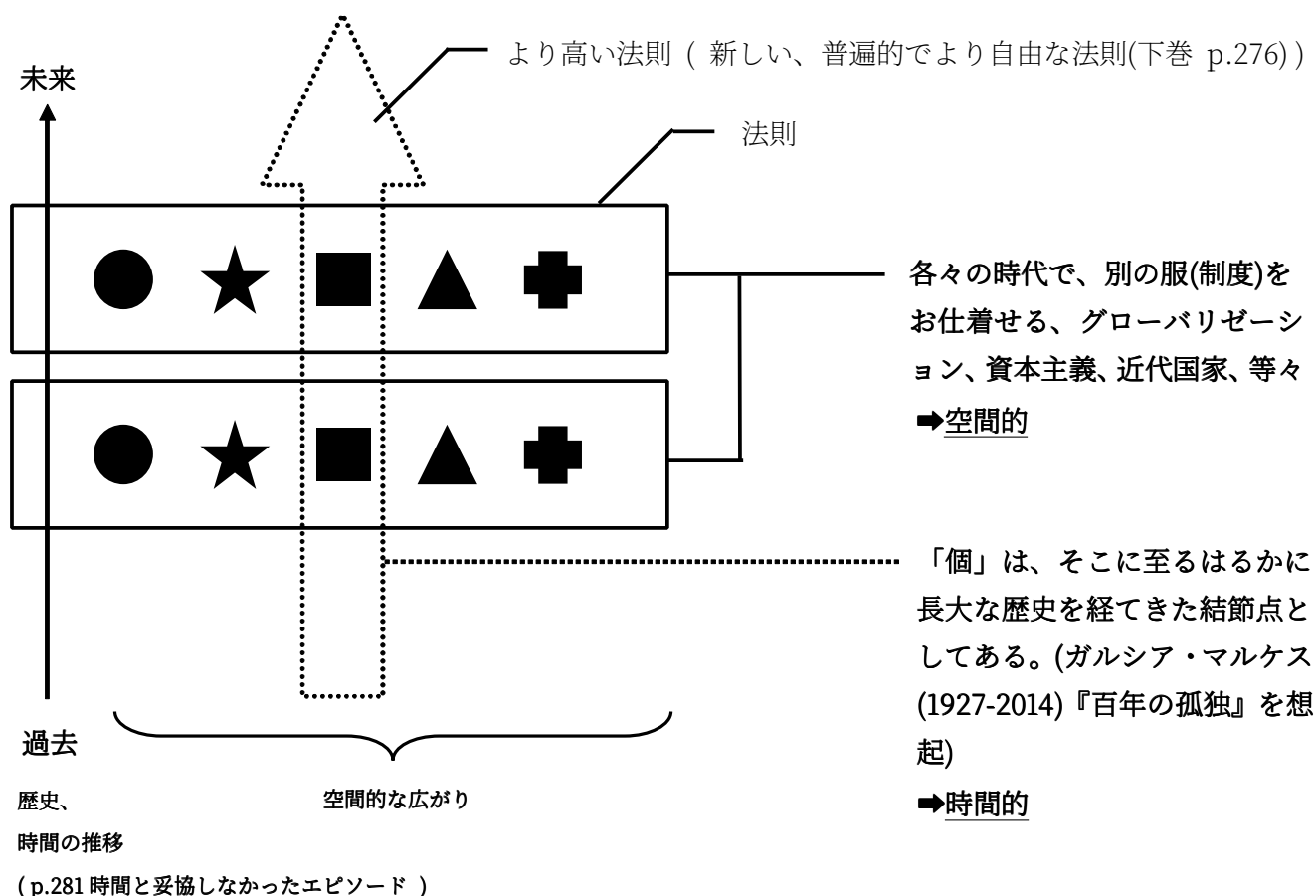
そして、この「個」こそが、普遍性に適うことだといっているのではないか。言い換えると、人間を均質化するのではなく、差異やちがひ、変化を活かすことこそが、普遍的 = より高い法則 だといっている。



2. 「より高い法則」について

内なる精神が発するもっともかすかな、しかも絶え間ない警告(それこそ真実を告げる声だ)に耳を傾けるとしても、ひとはこの精神が自分をどれほど極端な方向に——いっそ狂気にさえ——導くことになるか、見当もつかない。それでも人間は、決意と信念をかためるにつれて、そちらの方向への進むようになるのだ。ひとりの健康な人間が、ほんのかすかではあっても、ぜひ異議を唱えるべきだと感じるなら、それはやがて人類の論理と習慣にうち勝つことになるであろう。自分の道を踏みはずすところまで、内なる精神の声についていて者は、かつてひとりもない。そんなことをすればからだが衰弱してしまうかもしれないが、たとえそうだとしても嘆かわしい結果に終わったとはいえないだろう。それはより高い原則に従って生きた結果なのだから。(下巻 p.85) (斎藤幸平『人新生の「資本論」』で紹介されるグレッタ・トゥーンベリを想起するが、しかしこれは必ずしも特別な人ではなく、私たち市井の人と考えるべきだろうと思う。)

[図3]



3. 個性化について

私がウォールデン湖について観察したことは、人間の倫理にもあてはまるといえよう。(中略)もし、彼がアキレウスの故郷を思わせる切り立った海岸で、山々に囲まれて暮らし、その胸のうちにも山々の峰が影を落とし、あるいは映し出されているとするならば、この人物はそれに相応する深さをもつとみてよいであろう。一方、低くてなめらかな岸辺は、ひとがその側面において浅薄であることの証となる。人

体でいえば、高く秀でたひたいは、それにふさわしく深みのある思想を内部に蔵していることを暗示している。また、あらゆる入江一の入口には砂洲がよこぎっている。それぞれの入江が、しばらくのあいだは憩いの港となり、われわれをひきとめ、ある程度閉じこめてしまう。こうした性癖は、ふつう、決して気まぐれなものではなく、そのかたち、大きさ、方向などは、古代からの隆起軸である岸辺の岬によって決定されているのだ。入口の砂洲が、嵐や潮の干満や潮流によってしだいに大きくなったり、水がしりぞいてそれが水面に達したりすると、最初は思想を停泊させていた岸辺の単なる性癖にすぎなかった入江が、海から切り離された独自の湖となり、そのなかで思想は自己に固有の諸条件を獲得し、おそらくは塩水から淡水に変わり、水あまき海、死海、あるいは沼となるだろう。めいめいがこの世に生を受けるとき、こうした砂洲がどこかの水面に隆起したのだ、と考えるみてはどうだろうか？確かにわれわれは、ろくに航海術も知らないで、いだいている思想の大部分は、港のない海岸の沖合を遠く、あるいは近くをさまよい、やがて詩歌の湾の内側だけに精通するようになるか、公式の通関港に向かって舵を取り、学問の乾ドックにはいて、そこで俗世間向けに改修されるのが関の山であり、自然の潮流が思想の個性化に手を貸してくれることはないのである。(下巻 p.218)

➡個性化は、自然の潮流によってなされる（自然は可塑性をもっている(下巻 p.248)）

あらゆる国の言葉に通じ、あらゆる国の習慣に順応し、あらゆる旅行者よりも遠くへ行きたいと思うなら、さらにまた、あらゆる気候になじみ、スフィンクスの謎を解いて、その頭を石にぶつけさせようと思うなら、文字どおり古代の哲学者の教えに従って「汝自身を探検すべき」である。そのためには、眼力と勇気が要求される。自己探検の敗北者と脱走者だけが戦争に行くのだ。彼らは逃亡して軍隊に入る臆病者である。(下巻 p.273)

4.感想、公私の図地反転

ソローは1846年に、メキシコ戦争(1846年～1848年)と奴隷制度に反対して、人頭税の不払いの廉で逮捕される。(p.318 解説)

ふつう税金不払いというと、脱税、税逃れなどと、「私」腹を肥やしているようにいわれる。けれども、ソローの不払いは勿論そうではなく、表向き「公」とされる機関が「公」ではない、ということを知らせるものだといえる。それは「より高い法則」からすれば、「公」というより「私」に過ぎない。むしろ、「私」のなかにこそ、「公」は宿る。またしても偶然にも、この結論は茨木のり子の回と同じだった。

『茨木のり子の詩を読むと、そのような弱い私のなかの小さな倫理の萌芽のようなものを感じる。谷川俊太郎は、茨木のり子の詩について、「〈私〉を含みこむことで、〈公〉がより深く大きくなった」と評するが、「公」が「私」物化される現代において、むしろ「私」のなかに生まれる「公」をみてもよいのではないか。』

